

テレビ番組のサウンドアーカイブとしての可能性

——「NHKアーカイブス学術利用トライアル研究」より——

兼 古 勝 史

1 はじめに

1.1 研究の概要

わが国でテレビ放送が開始されてから60年目の節目にあたる2013年(平成25年)は、NHKなどを中心に、テレビの60年を振り返る様々な番組が特集され放送された。もともとフィルムに記録され、繰り返し視聴されることを前提に制作された映画等とは異なり、誕生当初、技術的にも生放送しか出来なかったテレビは、「今」を伝えるメディアである、とよく言われる。時代時代の「今」「この瞬間」に立ち会ってきたテレビは、それゆえにこそ、私たちの日々の暮らしの特定の時間や場面に寄り添い、時代や個人史の記憶とも深く結びついている。VTRや家庭用録画機が普及した今日も、テレビのこの本質は大きくはかわっていない。

本研究は、NHKアーカイブスの学術利用トライアル研究Ⅱに応募し採択ⁱされたもので、NHKアーカイブスに保管されている非公開番組を含む過去の番組資産を振り返り、主としてテレビ番組の“サウンドアーカイブ”としての側面、すなわち「音風景(サウンドスケープ)の記録」としての可能性を検証しようとするものである。

一般に、テレビ番組においては、映像の撮影が主眼であって、音風景・音環境の記録を直接の目的とするものは少ない。しかし本来「視+聴」覚メディアであるテレビ番組の中には、効果音やBGMといった演出としての音だけでなく、地域や時代の音風景や音の事象が記録されているもの

が少なからずあると思われる。写真や絵画、映像など、風景や環境の「視覚的な記録」に比べて、「聴覚的な記録」すなわち音風景が記録される機会は極めて少ない。こうした現状の中で、テレビ番組のアーカイブが音風景の理解のために役立てられるならば、私たちは、失われた過去の時代や、今は絶えてしまった地域の暮らしの中の音に再び立ち会うことができ、テレビは私たちの世界の記憶を一層豊かにしてくれるだろう。

本研究はサウンドスケープ研究に携わる鳥越けい子(青山学院大学)、小林田鶴子(共栄大学)との共同研究であり、研究は現在ⁱⁱも継続中であるが、今回は中間報告として、研究のベースとなった問題意識、研究の方法論等について述べ、「震災」というテーマを手がかりにした場合の調査研究活動の具体的な内容の一部を報告する。

1.2 サウンドスケープ研究における放送番組

サウンドスケープ研究において、放送番組は、その初期から主要な調査対象のひとつとして注目されていた。シェーファーらがカナダで行ったもっとも初期のサウンドスケープ調査として知られるWSP(World Soundsscape Project)(1965-1977)の中でも、バンクーバーの各AMラジオ放送の可聴範囲やその放送のリズムとテンポについての調査と考察がなされている(shafer,1974)。また、吉見はラジオなどの電気音響メディアがもたらしたサウンドスケープの変化についてシェーファーの「音分裂症」(schizophonia)ⁱⁱⁱ(シェーファー 1986)といった概念を引用しつつ説明し

ている(吉見 1995)。こうした視点は、ラジオに代表される音響メディアについて、それが、我々が日常的に体験するサウンドスケープを構成し、あるいはデザインする重要な要素であるという事実を明らかにしている。

一方、ラジオと同じ放送メディアであり、かつ20世紀の後半以降、ラジオ以上に私たちの日常環境に影響を及ぼしていると思われるテレビ放送については、こうした音のメディアとしての観点、あるいはサウンドスケープとのかかわりについての研究は、まだまだ未開拓であるといえる。また、サウンドスケープ研究におけるこうした放送番組の調査は、過去の音風景が記録された資料としてというよりは、現在、あるいは特定の時代や地域の音風景を形成する構成要素として放送番組を捉えるアプローチが主であったといえる。

1.3 放送番組によるイヤールウィットネス調査

過去のサウンドスケープをどこに、どのような方法で求め、明らかにしていくかということは、サウンドスケープ研究において重要な意味を持つ。当時の記録資料等から過去の音の風景を紐解き読み解いていく方法を「イヤールウィットネス」^{iv}調査といい、これまで、文学や新聞記事^v、あるいは絵画^{vi}、あるいは写真などから当時の音の風景を考証する様々な研究が行われてきた。本研究は、放送のために制作された番組コンテンツの記録を、「イヤールウィットネス」^{iv}調査のための資料として位置づけ、その意義や課題を明らかにしようとするものである。また、そのために「NHKアーカイブス学術利用トライアル研究」を通じて、NHKによって制作されそのアーカイブス内に記録された個々の番組を実際に視聴しつつ、関連する文献等によってそれぞれの番組制作の技術的・社会的等の背景を把握することによって、それぞれがサウンドスケープ調査のための基礎資料として、どのような特徴や価値をもつか、それを研究データとして使用する場合にはどのようなことを注意すべきかを検討・考察・整理するという方法をとる。

留意しておかなければいけないことは、「サウンドスケープ」とは単なる物理的な音響環境をいうのではなく、「個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境」(B.Truxax ed.,1978)ⁱⁱⁱであるということだ。即ち、人間が体験した、まさに「風景として」音環境にアプローチするのがサウンドスケープ研究であり、放送番組コンテンツを「サウンドスケープ研究」の資料として捉える場合、そこにどのような音が実際に記録されているか、個々の番組が作成された時代や場所といった情報などとともに、放送の送り手あるいは作り手等の「制作側の人間や社会がどのように知覚し、理解し、伝えようとしたか」ということ、さらには、それぞれの番組が制作された現場の録音等に関する技術的条件や制約等も含めた多角的な読み取りが必要となってくる。

以上のような考え方を踏まえ、今回は本研究全体の導入として、2013年4月より現在までに筆者等が行った「トライアル研究」の活動から、先ず「NHKアーカイブス・学術利用トライアル研究」についてその概要を明らかにし、「イヤールウィットネス」^{iv}としてのテレビ番組の分類方法について概説した後、具体的な番組事例に即して放送番組のサウンドアーカイブとしての可能性について報告する。

2 NHKアーカイブス学術利用トライアル研究

2.1 学術利用トライアル研究

「NHKアーカイブス・学術利用トライアル研究」とは、NHKアーカイブスが保存している過去の番組資産等を、現状非公開の番組も含めて、学術利用のために供するプロジェクトである。

NHKが蓄積してきた放送資産は、番組数77万、ニュース項目545万という世界屈指のアーカイブである。^{vii}この膨大な映像・音声遺産は、これまで、著作権や肖像権等の「権利処理」という壁に

阻まれ、あるいはプライバシーや人権等への配慮等から、そのごく一部しか公開されていない。また、公開されている一部の番組についても、基本的には「番組公開ライブラリー」を訪れ、そのブース内で視聴することのみが可能であり、例えばこれを教育用や研究用に持ち出したり、家庭で楽しむということは原則出来なかった。

こうした点を踏まえ、たとえば2008（平成20）年からのNHKオンデマンド（NOD）や2009（平成21）年からのNHKクリエイティブなどのように、インターネットを通じて家庭での視聴（登録有料制）や教育・表現用に番組や素材の一部を公開したり、2009（平成21）年からのNHKティーチャーズ・ライブラリーのように、教育機関等での視聴用に限って一部の番組をDVDによって貸し出しができる仕組み等も始められている。NHKアーカイブス・学術利用トライアル研究は、NHKによるこうした一連の放送番組の公開・活用・社会還元の流れの中で、より学術研究に資することを目的に、NHKアーカイブスの非公開番組を含む膨大な資料を大学等の研究者向けに公開するために、2009（平成21）年11月より開始された試験的なプロジェクトである。

では、このトライアル研究において、これまでにどのような研究がなされてきたかを見てみたい。表1は、2009年11月から2012年3月にかけて実施された最初のトライアル研究（第1期～第3期、および関西トライアル、各期の閲覧期間は約半年間）の応募と採択の件数およびその内訳である。この期間の応募総数は60件、このうち28件が採択された。

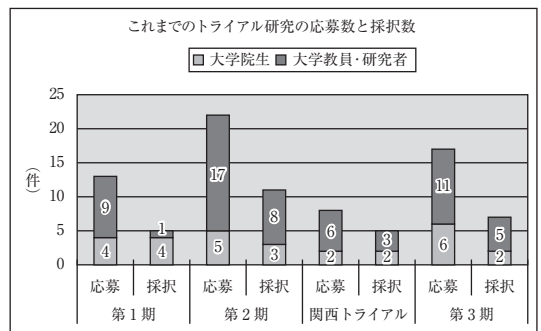
表2は、NHKアーカイブス学術利用事務局がホームページ上で公表している、学術利用トライアル研究（2009-2012）およびトライアルII（2012-2014）のこれまでの成果をもとにまとめたものである。応募・採択された研究テーマは幅広く、主として、戦後の重要な出来事や社会問題から、メディアによる表象、言説研究、メディア史研究など多彩であるが、音、サウンドスケープと

いう視点からの研究は未開拓であることがわかる。^{ix}

2.2 本研究の位置づけ

本研究では、過去の放送番組を、時代や地域の音の風景や、音と人々との関わりが記録された資料、すなわち「耳の証人」調査の対象として捉えなおし、その可能性を検証することにしたわけであるが、その際、NHKアーカイブスに保存されている放送番組のうち、もっとも数の多い、テレビ番組を主たる調査対象とすることとした。それは、現代において、テレビ番組はラジオ以上に、私たちの日常に深くかかわり、時代や地域の「今」「そのとき」を伝え記録している可能性が高いと考えるからである。また映像メディアの代表として語られることの多いテレビが、実は映像+音声のメディアであって、テレビ番組の中にこそ、地域や時代の音の風景に関する情報が含まれている可能性があると思うからである。実際に研究を進める過程で、筆者たちは、テレビのそうした特長ゆえに、サウンドスケープの持つ空間性、建築物との関わりを感じさせる音の記録に出会うことになった。（4.3）

表1



NHKアーカイブス学術利用 トライアル研究II・関西トライアルII、第1期、第2期 募集パンフレット（NHKアーカイブス 学術利用トライアル研究事務局（2012）より

表2 「NHKアーカイブス学術利用トライアル研究」これまでの研究内容

【第1期研究】

テレビ番組アーカイブによるメディア環境における「水俣」の記録と記憶に関する研究 小林直毅（法政大学 社会学部 教授）他2名
NHKテレビ報道における韓国の民主化運動—1972年～1987年を中心に— 李美淑（東京大学大学院 学際情報学府 社会情報学）
寺山修司の放送ジャンルにおける活動に関する実証研究 堀江秀史（東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻）
日本・韓国テレビ制作者の比較研究 金廷恩（上智大学大学院 文学研究科 新聞学専攻）
監視社会における移民の管理と主体性をめぐるポリティクス ～NHKアーカイブスにみる「在日外国人」へのナショナルなまなざしについての一考察～ 稲津秀樹（関西学院大学大学院 社会学研究科 社会学専攻）

【第2期研究】

生殖技術に対する生命倫理観の模索と構築—代理出産の報道を中心に 柳原良江（東京大学大学院 人文社会系研究科 グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」特任研究員）
テレビ番組アーカイブによる「水俣」のアクチュアリティと歴史性に関する研究 小林直毅（法政大学 社会学部 教授）他2名
放送における「空襲」認識の形成と変容に関する歴史学的研究 大岡聡（日本大学 法学部 准教授）他4名
開発主義とテレビ—日本・韓国・中国におけるダム映像を中心に 町村敬志（一橋大学大学院 社会学研究科 教授）他6名
認知症の本人はいかに描かれてきたか？—本人視点の出現・変遷・用法に関する探索的研究— 井口高志（奈良女子大学 生活環境学部 准教授）他2名
染症報道における「作動中の科学」の情報及び文脈の分析～新型インフルエンザ報道を中心に～ 渡邊友一郎（早稲田大学 大学院政治学研究科 ジャーナリズムコース・現日本テレビ）他3名
政治テレビ討論会と国家指導者像の変遷—日本党首討論会と米国大統領討論会 松本明日香（日本国際問題研究所 研究員）
NHKバラエティ番組に見る文字テロップの変遷—テレビにおける表記実態と機能の分化— 設樂馨（武庫川女子大学 文学部日本語日本文学科 助教）
ヴェトナム戦争と日本のジャーナリズム 岩間優希（立命館大学 衣笠総合研究機構研究員）
同時代型社会の象徴「終戦報道」の検証を通じた新しい大学教育理念「ドキュメンタリー教養」の構想とその情報インフラ整備の調査 川島高峰（明治大学 情報コミュニケーション学部 准教授 情報基盤本部副本部長）
美術番組の発展と影響 河原啓子（日本大学・武蔵野美術大学・立教大学ほか 非常勤講師）

【第3期研究】

「被爆の記憶」の語り方のエスノメソドロジー 好井裕明（日本大学 文理学部 教授）
東京オリンピック（1964）—メディア・イベントと国民神話 Merklejn Iwona（メルクレイン・イヴォナ）（東京大学 社会科学研究所研究員）
三陸の津波被災地の風景の消失を考える—「景観史」として還元される地域の肖像— 水島久光（東海大学 文学部 教授）他2名
テレビが「保護と観光のまなざし」形成に果たした役割分析と地域民俗資料としてのアーカイブスの可能性 関礼子（立教大学 社会学部 教授）他2名
テレビにおける戦後「農村」表象とその構築プロセス：「農事番組」を手がかりとして 船戸修一（静岡文化芸術大学 文化政策学部文化政策学科 講師）他5名
テレビが描いた母と子どもの関係—NHK教育テレビ「おかあさんの勉強室」における母親と〈子ども〉— 津田好子（東京女子大学大学院 人間科学研究科 生涯人間科学専攻）
建築資料の価値を持った映像資料の発見と活用方法の研究—NHK教育「テレビの旅」を一事例として— 本橋仁（早稲田大学 創造理工学研究科 建築学専攻）他4名

【関西トライアル研究】

テレビドキュメンタリーにおけるアイヌ表象と他者性の問題にかかわる考察～戦後60年間の軌跡と変容～ 崔銀姫（佛教大学 社会学部現代社会学科 准教授）
ニュース番組における言語変化に関する研究 轟里香（北陸大学 教育能力開発センター 准教授）
「テレビ的知」の変容の社会学的考察? クイズ番組における正解と不正解を事例に 山崎晶（四国学院大学 総合教育研究センター 准教授）
映像メディアにみる「沖縄」をめぐる経済言説～戦後日本社会における他者表象に関する一考察～ 上原健太郎（大阪市立大学大学院 文学研究科人間行動学専攻）
お笑い番組にみる人々の興味を惹き付けるインタラクション・デザイン 田村篤史（関西大学大学院 総合情報学研究科）
「NHKアーカイブス学術利用トライアルⅡ～これまでの審査結果」より 2013年11月16日閲覧 http://www.nhk.or.jp/archives/academic/result/result1-1.html http://www.nhk.or.jp/archives/academic/result/result1-2.html http://www.nhk.or.jp/archives/academic/result/result1-3.html http://www.nhk.or.jp/archives/academic/result/kansai1.html

2.3 本研究の目的

先行研究の少ない本研究においては、サウンドスケープ研究として放送番組アーカイブにアプローチするための方法論、整序軸の構築といった、研究の枠組みを導き出し構築することも、主要な目的のひとつである。さらにテーマと地域を絞り

込んだ上での、具体的な番組を導き出された枠組みに基づいて考察することを通して、研究の枠組みの妥当性を検証し、修正を加えつつ深めていくこと、こうした2つの側面の往復とフィードバックが必要になる。

3 放送に記録された音風景

3.1. 音の記録という観点から見た時代区分

放送番組を「音の記録」という観点から捉えなおしたとき、どのような整理の方法があるだろうか。研究を進めるにあたって、主として制作および送出時の技術的な要件に着目して、おおよそ次のような時代区分を設定した。

- (1) 1925年～1953年：ラジオおよびニュース映画の時代
- (2) 1953年～1970年代中盤：テレビ、フィルム撮影（別録り）の時代
- (3) 1970年代中盤～1990年頃：テレビ、VTR撮影（同時録音）の時代
- (4) 1990年頃～現在：テレビ、ステレオ～サラウンド（高音質・臨場感）の時代

以下、順を追って各時代の概要を述べる。

- (1) 1925年～1953年：ラジオおよびニュース映画の時代

テレビがまだ出現していないこの時期、ラジオが唯一の放送メディアであった。この時代の録音として残っている放送番組は少ないが、逆に録音（主としてレコード盤に記録）されたものは、時代を語る貴重な音の記録といえる。NHKアーカイブに保存されているものの中でこの時代の映像番組としては、外部制作作品（NHK放送番組以外の、外部の取材・制作による映像等）やニュース映画などがある。

- (2) 1953年～1970年代中盤：テレビ（別撮）の時代

テレビ放送が開始された初期、テレビは音に関する独自の的方法論を確立していなかった。それまでのニュース映画的手法（映像に音楽やナレーションをかぶせる）やラジオ番組の録音構成を援用した手法（音楽とナレーション、インタビュー等で構成）の番組も多い中、やがてドキュメンタリーなどの分野で、テレビ独自の表現を獲得していく。重要なことは、この時代の映像はフィルム

による撮影であり、基本的に音と映像は別どりであったということである。すなわち、多くの場面（シーン）で音声は、後付けの音楽やナレーションによって構成されている。にもかかわらず、その中であって、敢えて撮影現場で収録され、映像に添えられた音は、特別な意味を持つと考えられる。例えば初期のテレビドキュメンタリー番組『日本の素顔』（1957（昭和32）年-1964（昭和39）年）やこれに続く『新日本紀行』（1963（昭和38）年-1982（昭和57）年）などのドキュメンタリー番組群の中には、しばしば現場の音（例えば、サイレン音、バイクの音、船の汽笛や工場の音、建設現場の音など）が象徴的な意味合いを持って記録されている。これらは、別録りであるがゆえに、後の「VTR＝同時録音の時代」に比べて、取材者が意識的に収録したという意味において、興味深い音の記録といえよう[※]。それらの音は、伝えられるべき、聞かれるべき音として番組の中に組み込まれたからだ。番組の中ではしばしば、こうした収録音が雄弁に語りつつストーリーを牽引していく事例がみられる。[※]同時に、ここで表現された音は、基本的には、風景・環境としての音というよりも、個別の音事象・音響体を中心となって紡いでいく音の世界である場合が多く見られる。

- (3) 1970年代中盤～1990年頃：テレビ（同録）の時代

1970年代の中盤、日本でもENG（Electric News Gathering System）による取材体制が取り入れられ、テレビ撮影が従来のフィルム撮影からVTR撮影に移行し、音声と映像を同時に収録できるようになると、音声は映像に従属して（あるいは少なくとも並行して、いわば映像の現場音として）収録される場面が増えてくる。このことは、これまでの「意図的に」収録していた音声、だけではなく、映像に伴い無意図的に「偶然に」収録される「地」としての音＝「現場音」の領域を広げることとなった。こうしたいわば背景音の記録の中に、日常の地域の何気ない音やその場所なら

では空間の響き等が、偶然記録される余地が生まれた可能性がある。次章で述べる三陸鉄道の駅舎などの事例はこうしたVTR時代のテレビがはからずも記録した（震災で）「失われた音の風景」の貴重なアーカイブの例としてあげることができよう。

(4) 1990年代～現在：テレビ（高音質・臨場感）の時代

1990年代以降、地上波テレビ放送においても音声多重放送を利用したステレオ放送の割合が多くなり、2000年12月のBSデジタル放送開始後、2001年から5.1サラウンド放送が少しずつ広がっていき、音の風景がテレビ番組の表現のテーマとして意識されるようになってくる。スポーツ放送における臨場感の追及、音の風景を主題にしたハイビジョン番組（『音のある風景』シリーズや、2004年から不定期で放送が続いている『里山の音景色』シリーズや、など）の広がりなど、デジタル・サラウンド放送の時代を迎えて、テレビ番組における音の風景の重要性は高まりつつある。

こうした区分はもちろん厳密なものではなく、研究を進めるにあたっての一つの目安であり、現段階で膨大な番組アーカイブを整理してとらえるためのひとつの仮説に過ぎない。技術の導入や変遷、現場の意識の変化といったものは、時間をかけて行きつ戻りつ浸透していくものであろうし、大都市部と地方とでも浸透具合は異なる。個々の番組事例は、それぞれの制作時期とこうした時代区分の照合によってその実態が明らかになるという性格のものではない。それにもかかわらず、こうした区分を試みることによって、放送番組の中に記録された音が、意図的に切り取られた「図」としての音の時代から、映像に伴う「地」としての背景音の段階を経て、今再び「図」として立ち上がり、音が主題となる可能性の大きな時代を迎えているという予感を感じ取ることができる。また個々の音事象・音響体による構成という「意味

性・記号としての音」から臨場感・場の雰囲気といった「環境・肌理としての音」へと向かう放送番組における音の世界の方向性を見出すことができる

3.2 「耳の証人」としての放送記録の位置づけ

放送番組の中に記録された音風景をサウンドスケープを紐解く「耳の証人」として考察する場合、次のようないくつかの観点に留意することが重要と思われる。

① 番組の作り手、送り手から見た「音の風景」として

A. 「選ばれた音」と「録音されなかった音」の存在

録音された音がその当時、現場にあったということは、ある程度事実であるかもしれないが、同時に録音されなかった多くの音がそこにあったということをおぼろげに忘れてはならないだろう。何ゆえマイクはその音を切り取ったのか、置き去りにされた音はなんだったのか、慎重に考えなければならない。一方、音響効果的に付加された音はないか、という観点からも十分な検討が必要である。

B. 「意図された音」と「偶然に入った音」の区別

放送番組、とりわけテレビ番組には、その音を図として積極的に伝えようとしたケースと、映像に収められた時間の現場音として偶然に収録されたケースとがある。また収録されているながら番組制作過程で使用に至らなかった音もあるだろう。（その意味では、意図されたか偶然かという区別はともかくとして、放送番組にまで残った音は、ある意味で選択された結果の音であるとも言える。）音と作り手・送り手との関係を考える際、こうした区別は重要である。

C. 「録音できなかった音」の意味

意図的に録音されなかった音、あるいは番組製作過程で切り捨てられた音とは逆に、録

音したい音であったが録音することができなかった音についても、思いをはせる必要があるだろう。収録や送出、受像機側の技術的な制約、あるいは社会的、文化的な理由から、放送では伝えられない音もまた存在する可能性を忘れてはならない。

② 聞き手から見た「音の風景」として

放送番組の音は、ある意味で、数人の制作スタッフ、煎じ詰めれば、特定のディレクターや録音担当者の耳によって切り取られ、記録された環境の一側面であるが、同時にそれは「放送」され多くの人々に視聴されることによって、時代や地域の「風景」として共有され記憶されていく、それが地域の音の風景のスタンダードともなりうる場合もある。ここには放送が風景に対して潜在的に持っている可能性と危さが共存している。制作した時点では、ある特定の個人や集団がとらえた、個人的な風景であったものが、番組として取り上げられ、放送されることを通して、制作側が望むと望むざるとにかかわらず、より多くの人々が体験する「共有された風景」としての意味を持つようになる。筆者らが放送番組を「耳の証人」として研究する理由もここにある。

4 テレビ番組に見る「震災」によって失われた音風景の記録

4.1. 調査対象地域とテーマ

2.3で述べたように、本研究の目的は2つある。ひとつは、サウンドスケープ研究として放送番組アーカイブにアプローチするための方法論、整序軸といった、研究の枠組みを導き出し構築することであり、これについては、3章で述べた通りである。もうひとつは、具体的に地域とテーマを絞って番組を視聴しつつ、サウンドアーカイブとしての可能性を検討することであり、今回はその第一歩として、一瞬のうちに地域の環境に劇的な

変化をもたらした風景を破壊した近年の2つの大震災、1996年の「阪神大震災」、2013年の「東日本大震災」に注目し、これによって音風景がどのように失われ変化したのかを、過去の放送番組から見出していくこととした。このような、風景の変化が顕著なものをまず扱うことによって、放送番組のサウンドアーカイブとしての意味を象徴的に捉えられるのではないかと考えた。

具体的には、神戸地域、三陸地域を対象に、当該地域を取材した番組から、地域にとって重要と思われる音風景が記録されているシーンを抽出し、それが震災前後にどのように変化したのか、番組及びその他の資料、現地での観察・聞き取り調査などとも合わせて検証することとした。

4.2 対象番組の検索方法～三陸の場合

ここで筆者らが直面したのは、対象となる番組数の少なさ、とりわけ、地域の音の風景が収録されていると思われる番組へのアクセスの難しさであった。

NHKアーカイブスの保存番組を検索する「NHKアーカイブス」のホームページ中の「NHKクロニクル」のページから「三陸」「音」というキーワードで、東日本大震災前日までに放送された番組を検索すると、わずかに5件程度しか出てこない。⁴⁴そしてその多くが「音声」や「音楽」といった番組データ記載文中の「音」の文字を捉えて検索されたものであって、「音風景」に関連する内容で検索されたものはひとつもなかった。そこで、「音」というキーワードで検索することを諦め、「三陸」あるいは「石巻」「気仙沼」といった地域のキーワードで検索したところ、震災以前の放送分として、それぞれ140件、47件、49件の番組がヒットした。このうち重複分を除く228件の番組群の中から、番組タイトル、概要等のデータを参照しつつ対照番組を絞り込んでいった。地域名のみでキーワード検索した番組群であるため、音風景とは関わりのまったくない内容のものも多く、またアーカイブの保存・変換上

の制約から、閲覧できない番組（地方局保存のもの、閲覧できるフォーマットに変換不能なもの等）も少なくなかった。全体数はさらに限られたが、その中から、「自然の景観」、「祭りや行事などの伝統文化」、「漁、漁港、市場」などの産業の音、「鉄道・駅」などの交通の音などに着目しつつ番組を絞り込み、順次視聴しながら音風景に関する記録があるかどうか、確認していった。（現在も検索閲覧中であり、最終的な番組数は現段階で未定である）こうした手続きを経て到達した番組の中から、ここではテレビが伝える音風景の記録の象徴的な事例として、岩手県下閉伊郡田野畑村の三陸鉄道駅舎の事例を報告する。

4.3 三陸鉄道・島越駅舎の音風景

岩手県下閉伊郡田野畑は、かつては「陸の孤島」とも言われ、1984年に三陸鉄道が開通するまでは、交通の不便な、いわゆる「僻地」として語られることの多い地域であった。NHKアーカイブスのテレビ番組の中でも『テレビ婦人の時間～カメラと共に～三陸の子ら～岩手県下閉伊郡田野畑村島ノ越』（1960年8月2日放送）、『ある人生～田野畑日記』（1969年2月15日放送）『新日本紀行～陸中海岸』（1966/6/27）などでしばしば高齢・過疎の里として取り上げられてきた。1984年、この地に住民の百年来の願いだった鉄道が開通し、その喜びと未来への期待へと沸く村の様子をレポートした番組が『教養セミナー「ふるさとの発見」～わがまちのルネサンス第3回「みちのく・新駅誕生の村～岩手県・田野畑村～』』（1985年2月18日放送）である。

番組は三陸鉄道の開通を喜ぶ地元の人たちが「カンパネラ田野畑」と口々に叫ぶシーンから始まる。駅名の「カンパネラ」は、宮澤賢治の童話「銀河鉄道の夜」の主人公の友人の名に因んだもので、「友情を大切に、自ら友人のために身を尽くすことの意味が込められた駅名である」という説明に続いて、「かつて、ここは陸の孤島といわれていた。」というナレーションが流

れる。

田野畑駅の隣は「カルボナード島越（しまのこし）」駅で、この駅名も賢治の作品から採った名であり、ドーム型の洒落た洋風のデザインが印象的な駅舎だ。（写真1参照）。駅舎内にある喫茶店で、作家で番組レポーター役の高橋克彦氏が当時の町長にインタビューするシーンが出てくる。（写真2参照）二人の会話の背景に、コーヒーカップを皿に置く音、スプーンがカップに当たる音、そして他のテーブルでの話声が、駅舎の天井の高い構造に響きわたって何とも味わい深い雰囲気醸し出している。ここにはこの駅舎独特の響きとしての音風景が存在していた。

番組の放送から26年後、カルボナード島越駅

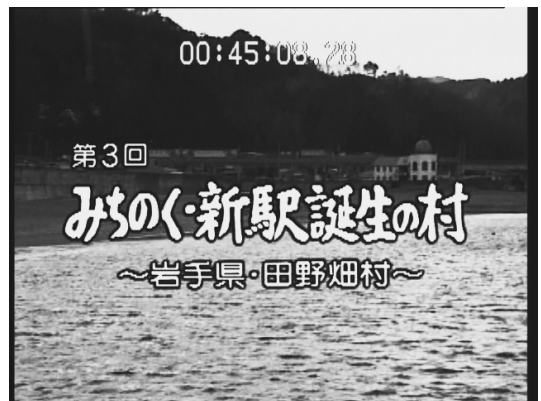


写真1 番組エンドタイトルと島越駅



写真2 駅舎内部の喫茶店（右端の後姿が町長）

は、東日本大震災の津波の直撃を受け、駅舎は全壊、三陸鉄道の橋梁も流され、現在に至るもここは不通区間となっている。そのため、番組中に凶らずも記録されていたこの駅舎ならではの音風景は、今は消滅して聞くことができない。三陸鉄道北リアス線の復旧工事は2012年6月より開始されたが、2014年4月に開通予定の新路線は、安全確保の面からもかつての駅舎の位置よりも高台に作られることになっており、4半世紀にわたり地域のシンボルとして人々に愛されてきたこの駅舎の独特の音風景は、おそらくこの場所で二度と聞くことのできない音でもある。番組は在りし日の駅舎の視覚的な姿だけでなく、聴覚的な佇まいが記録された貴重な資料として、地域にとってかけがえのない財産であるといえる。こうした音は、文字や写真、あるいはラジオや録音といった音響メディアだけで伝えることは難しい。建築物としての駅舎とそこでなされる営みがあつてのこうした音風景こそ、言葉でも画像でもなく、視聴覚メディアたるテレビだからこそ伝えられるものであろう。

重要なことは、こうした地域の音風景が、もともと記録すべき対象として明確に意識されていたとは限らないことである。この番組の場合、村長とレポーターの会話の収録がメインであつて、そこにいわば、背景、地の音として録音されていたのが、この駅舎の基調音としての響きであつたわけである。このように、テレビカメラが映像と音を同時に収録できるようになった70年代以降の番組には、番組の意図にかかわらず、背景としての音風景がある意味偶然に記録されている可能性が、様々な番組を丁寧に視聴していけばあるということが予想される。

もうひとつ重要なことは、この駅舎の音風景が、地域にとってどのような存在であつたのか、私たちは、過去の番組からうかがい知ることができるということである。この地に取材した他の番組も合わせて、僻地としての長い歴史と、鉄道開通への人々への願い、新駅誕生に村がかけた期待の深

さ、伸び行く地域の象徴・誇りとしての斬新な駅舎、駅舎の風景にこめられた地域の思いの一端を我々は、検索した番組群から知ることができた。1.3で述べたように「サウンドスケープ」とは単に、何の音がしていた、どのような響きであつたという物理的なことだけではなく、そうした音の人々がどのようなものとして受けとめ聴いていたかという点に注目した「風景として」の音環境をあらゆる概念だということを考えれば、こうした番組群が、単なる音響の記録として以上の、地域の風景、音、人との関わりを理解するための資料としての可能性を持っていることがわかる。

この他、気仙沼の魚市場の昭和時代の賑わいや、大漁時に唄われる「大漁唄い込み」（『父がケン語～南三陸ことばの旅～』1986年2月3日放送）、三陸地方や房総、伊豆、対馬など、現在ではごく限られた地域でしか行われていない独特の伝統漁法の「突きん棒漁」の威勢のよい掛け（『ふるさとネットワーク～東北アワー730 海の本勝負！ 突きん棒漁～200キロのカジキを追って』1986年10月5日放送）、あるいは、三陸地方各地に伝わる独特の「獅子踊り」や「獅子舞」などの伝統行事など（『ふるさとの伝承～獅子舞列島』1999年2月7日放送）、震災で一時的に絶えてしまったり、時代の流れとともに希少になってきた営みなど様々な貴重な風景の音がいくつもの番組にちりばめられ残っていることが確かめられた。こうした事例の詳細や、神戸の音風景の事例については、次の機会に譲りたい。

5 まとめと課題

5.1 成果

今回は中間報告であるため、一部の事例のみの報告にとどめたが、様々な時代の番組を視聴することを通して、放送番組をサウンドアーカイブとして捉えるための、大まかな時代区分と留意点を導き出すことができたこと、まずこの点を第1の成果としたい。続いて、放送番組のアーカイブが、

地域や時代の音風景をも伝え得るサウンドアーカイブとしての可能性を持つことを、「震災」というテーマに即して具体的な番組事例として確認できたこと、その際に、文字や写真、録音媒体とは異なる、テレビ番組だからこそ伝え得る音風景のあることが発見できたことが、第2の成果である。

5.2 課題

一方、今後の課題としてあげられるのは、膨大な番組の中から、音風景の記録に資すると思われる番組あるいはシーンをどのように抽出するか、「音」という検索キーワードでは必ずしも掬い取れない、番組の中に埋もれた音風景の情報にいかにしてたどり着くか、という問題である。今回、三陸地域の番組については、地域を限定し、震災以前の番組でNHKアーカイブスで閲覧可能な番組が100本単位に限定されていたため、そのタイトル、および、時にデータベース内に詳細に記述されている番組構成表などのデータを読み込んでいき、絞り込んだある程度の番組を順次閲覧していくことで、いくつかの事例に到達できた。しかし、例えば神戸や東京などの大都市の場合、番組数自体がおそらく万を超える膨大な数に上るため、この方法ではとても絞り込めない。鐘の音や伝統行事などでもともと「音」に対して意識的にアプローチしている番組であれば、それらの情報の痕跡がデータベースの資料上に残されている可能性があるとしても、まさに映像と音声の同時録音の仕組みによって、図らずも記録された町の雑踏や賑わい、様々な産業や職人の奏でる音等について、どのようにそれを効率よく見つけ出すか、というのは今後の大きな課題である。

最後に、本研究は、もとより放送番組アーカイブスに保存された番組の視聴・分析にとどまるものではなく、そこから抽出された地域や時代の音風景について、その風景が現在どのような状況にあるのか、また地域の人々はその音をどのように聞き、どのようなものとして記憶しているのか、していないのか、実際のフィールドでの観察・聞き取り調査等と組み合わせて理解が深まるもので

あると筆者たちは考えている。番組アーカイブは、アーカイブ内で完結するものではなく、アーカイブの外の世界とつながることによってこそ真価を発揮できると思うからだ。

注

- i NHKアーカイブス学術利用トライアルⅡ第2期7件の研究のうちのひとつ
詳細は「NHKアーカイブス学術利用トライアルⅡ」HP <http://www.nhk.or.jp/archives/academic/result/result2-2.html> を参照
- ii 2014年3月現在
- iii 「音分裂症」(schizophonia) とは、20世紀を通じて進行したとされる「元の音とその音の電気音響的な伝達・再生との分裂」した状況の異常性を表現する言葉。
- iv Ear Witness 耳の証人 サウンドスケープを歴史的に捉えるための神話や文学等に記録された音の風景のこと
- v 新聞記事に着目したイヤewitness研究としては、例えば上野正章(2014)による明治期の京都のサウンドスケープの調査などがある
- vi 例えば、樋口昭(1989)による「洛中洛外図」に基づく中世都市の音空間の研究、込山俊朗(1997)による「名画に見る音風景」研究などがある。
- vii サウンドスケープの定義に関する訳文は、日本サウンドスケープ協会HPの用語解説による。
- viii 『NHKアーカイブス学術利用 トライアルⅡ・関西トライアルⅡ 第1期第2期募集パンフレット』(2012/NHKアーカイブス学術利用トライアル研究事務局)より
- ix トライアル研究Ⅰ～第3期の「三陸の津波被災地の風景を考える～「景観史」として還元される地域の肖像～」(水島・兼古・小河原)の一章において、「見えざる景観の構成要素」として、筆者が、「音」の切り口からアーカイブ映像を分析している事例がある。
- x 例えば『日本の素顔～ガード下の東京』(1958年)、『日本の素顔～隠れキリシタン』(1959年)

- xi 例えば『新日本紀行～陸中海岸』（1966年）など、この点については、NHKアーカイブス学術利用トライアル研究の「三陸の津波被災地の風景の消失を考える～「景観史」として還元される地域の肖像」（水島・兼古・小河原、2012）に詳しい。
- xii 「NHKアーカイブス」のHP～「NHKクロニクル～NHK保存番組検索」
<http://www.nhk.or.jp/chronicle/index2.html>
 (2013年12月6日アクセス)

ect, Simon Fraser University, and ARC Publications.

参考文献

- 上野正章、2014、「『京都日出新聞』に連載された『写生廿四時』から聴いた明治期末の京都のサウンドスケープ」、『サウンドスケープ』第15巻、日本サウンドスケープ協会。
- 「NHKアーカイブス学術利用トライアルⅡ～これまでの審査結果～トライアル研究Ⅱ 第2期分」
<http://www.nhk.or.jp/archives/academic/result/result2-2.html> (2013年12月6日アクセス)。
- 込山俊朗、1997、「名画に見る「音風景」」、『現代のエスプリ 354』、谷村昇・鳥越けい子編、至文堂、1-4。
- シェーファー、R.M.、1986、『世界の調律～サウンドスケープとは何か』（鳥越けい子他訳）、平凡社。
- 樋口昭、1989、「洛中洛外図の音と世界～上杉家本にみる都市の音空間」、『美と形』、中森義宗・上村保子編、東信堂、158-184。
- 水島久光・兼古勝史・小川原あや、2012、「三陸の津波被災地の風景の消失を考える～「景観史」として還元される地域の肖像」、『東海大学紀要文学部 第97輯』、54-93。
- 吉見俊哉、1995、『「声」の資本主義～電話・ラジオ・蓄音機の社会史』、講談社。
- Schafer, Murray (ed.). 1974. *The Vancouver Soundscape*, Vancouver : By the World Soundscape Project with the support of British Columbia Hydro.
- Truax, Barry (ed.) 1978. *Handbook for Acoustic Ecology*, Vancouver : By the World Soundscape Proj-